

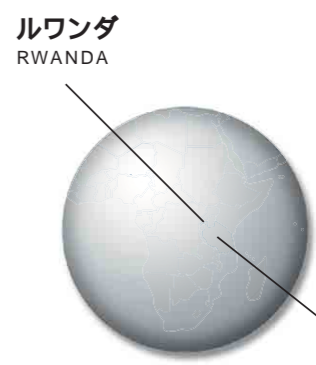


完成したばかりの「オリセット® ネット」に入る草野さん。現地の工場では、樹脂から作った糸をより合わせ、編み機で大きなシートを編んでから裁断し、立体的に縫い合わせて蚊帳を完成させる。その後、実際に中に入って点検し、品質を確認してから包装する

FIELD SKETCH

草野満代さんと道傳愛子さん、アフリカの大地へ

フリーアナウンサーの草野満代さんがタンザニアを、NHK解説委員の道傳愛子さんがルワンダを訪問し、JICAの事業などを視察した。明るい変化の兆しが見え始めたアフリカの大地で、2人は何を感じたのだろうか。



ルワンダ
RWANDA

タンザニア
TANZANIA

草野さんのタンザニア訪問

今年3月、フリーアナウンサーの草野満代さんがタンザニアを訪れ、日本の協力現場を精力的に視察した。国際協力の最前線に触れた彼女の目には、その成果と課題が映ったよつ。中でも、次の2つは今年10月に発足する新JICAが事業を実施する上でヒントになるかもしれない。

一つは、無償資金協力で整備されたマクユニ・ンゴロンゴロ道路。この道の終点には、世界遺産で国内最大の観光資源の一つ、ンゴロンゴロ自然保護区がある。保護区ま

で良好な道路が続けば観光客も増え、収入の拡大につながるだろう。日本は過去にアジアでこうしたインフラ整備支援を行い、経済成長の推進力になったと評価されている。この経験をもとに、今後はアフリカで「成長の加速化」を進める方針だ。

元気なアフリカを伝えたい

マクユニ・ンゴロンゴロ道路の出発点。ここからンゴロンゴロ自然保護区までの約80キロが日本の無償資金協力で整備された。沿線地域は一大穀倉地帯であり、農産物の輸送にも重要な道路となっている



開発されたもので、その後、日本の無償資金協力で670万張を各国に配布。さらに同社がタンザニアの蚊帳メーカーに技術を無償で提供して現地での量産体制を築き、1000人近くの雇用が創出された。

「成長の加速化」を進める方針だ。JICAタンザニア事務所の坪池明日香さんが「こう配やカーブの設計、環境保全などに日本の技術が生かされていて、高品質かつ現地の技術水準で維持可能な道路です」と説明。草野さんはうなずきながら「現地のニーズを十分把握した上で、どのような形で日本の技術や経験を活用した援助を行

つて、結果的にはコスト面でも「オリセット® ネット」にメリットがあると途上国政府を説得できれば、競争性・透明性が確保された上で日本の技術が勝ち残っていけるだろう。

企業の社会的責任(CSR)に関心を寄せる草野さんは、住友化学の中西健一課長に「採算が合わなければその部門を切り捨

てるのが企業の常識だと思いますが……」と質問。中西課長は苦笑しながら「オリセット® ネットだけでは決して黒字とは言えません。一方で、今後4年間でアフリカだけでも毎年6000〜7000万張が必要と

「現地に来て、率直に、これほど明るいアフリカに驚きました。『発展』という尺度ではやるべきことがまだ数多くあるとしても、タンザニアの人たちの気持ちや姿勢は、元気がすよね。ただ日本では、悲惨で陰鬱な側面ばかり強調されている気がします。この『元気なアフリカ』をきちんと伝えることが大切だと実感しました」



日本の無償資金協力で建てられた首都ダルエスサラームのソコイネ小学校で。記念撮影に喜びと緊張が入り混じった表情の子どもたち

「この蚊帳は、国際保健機関(WHO)から世界で初めて長期残効型防虫蚊帳として認められ、使用が推奨されている。しかし、その効果の高さを開発途上国の政府や援助機関の関係者に十分理解されず、国際競争入札でも苦戦を強いられている。それでも、1個当たりではなく、耐用年数の観点から1年当たりの価格であれば勝てる」という。

「現場に来て、率直に、これほど明るいアフリカに驚きました。『発展』という尺度ではやるべきことがまだ数多くあるとしても、タンザニアの人たちの気持ちや姿勢は、元気がすよね。ただ日本では、悲惨で陰鬱な側面ばかり強調されている気がします。この『元気なアフリカ』をきちんと伝えることが大切だと実感しました」

工場を出た後、「ビジネスとして成立させるべき、というのはその通りですね。一方で、制度づくりのよ

きつと、草野さんはこれからいろいろなメディアでアフリカの「今の姿」を伝えてくれるはずだ。



複数の品種のコメが売られているキリマンジャロ州・モシの市場で。タンザニアでは近年コメの消費が伸びており、政府も灌漑農業を推進している。日本は1970年代から、同州で灌漑稲作技術の確立とその技術移転を行ってきた



太鼓のリズムに合わせて子どもたちと歌って踊る潤田さん

道傳さんのルワンダ訪問

1994年4月、2つの部族が対立し、一般市民を巻き込んだ大虐殺を引き起こしたルワンダ。あれから14年がたち、この国は復興から開発へ着実に歩み出している。今年4月、NHK解説委員の道傳愛子さんが現地を訪問・取材した。

首都キガリにある私立学校のウムチョ・ムイーザ学園。附属の幼稚園で働く青年海外協力隊員の潤田さち子さんが日焼けした顔で迎えてくれた。

「親の子どもに対する期待がとても大きいですね。内戦や経済的理由で学校に通えなかった親もいますから。この学校では、両親を失った孤児を無料で受け入れています」

実は彼女、隊員になるまで94年の虐殺を知らなかった。今も、職場や日常生活で内戦の園児が工作で鉄砲を作ったり、家からピストルのおもちゃを持ってきたときに先生が厳しくしかったのを見て、ハッと気付かされたそう。チャールズ校長は「この学園には当時対立していた両部族の教師がいる。しかし、『和解』という共通の認識のもとで良い教育、文化を創ろうと一致している」

と述べた。

学園は2000年に開校し、運営には福島県にあるNPO法人「ルワンダの教育を考える会」が支援しており、リコーダーや鍵盤ハーモニカなどの楽器が寄贈されている。校舎の増築も進行中だ。帰り際、小学6年生が潤田さんから教わった日本語の「ドレミの歌」と学園の校歌を披露してくれた。「ウムチョ ムイーザ アザシャシャ グラネ」（良い文化を、未来は明るい）と歌う声は今も耳に残る。

ルワンダのビル・ゲイツに

ルワンダは「千の丘」の国だ。キガリから車で1時間半。丘を越え、谷に広がる紅茶畑の茶摘みを眺め、また丘に登ると、頂上にトゥンバ高等技術専門学校が現れる。

ここは、もともとは90年に日本の無償資金協力で建設された技術学校だが、94年にルワンダ愛国戦線（RPF）と旧政府軍双方の前線基地



トゥンバ高等技術専門学校で行われているコンピューターの授業



ウムチョ・ムイーザ学園の校舎で。チャールズ校長(中央)と道傳さん(右隣)、潤田さん(左隣)、左端は筆者

ピューターの授業を視察した道傳さんが学生にインタビューすると、「米国マイクロソフトのビル・ゲイツのようになりたい」「ITでこの国を発展させられる」と頼もしい。一方、「(皆が)ビジネスに成功すれば、部族対立の温床になる格差や不安要素はなくなるだろう」との声も聞かれた。

とはいえ卒業後の就職、雇用機会は未知数だ。各コースの運営を管理している岡野貴誠(たかの)専門家は、「大企業への就職を目指すのではなく、最初は小さくても個人で起業できるベンチャーを目指したい。学生たちはまず、ホテルの予約管理や図書館のデータベースを作れるような汎用性の高いプログラムソフトから学んでいます」と、地に足の着いた現実路線を語った。「千の丘」の国である。千里の道も一歩からだ。

それぞれの国、それぞれのニーズに合った支援をすることができると思います」と語った。

人々の心に平和が定着するように、開発援助の恩恵が、虐殺の加害者・被害者の家族のみならず、次代を担う子どもや若者に共生の希望をもたらすものであってほしいと願う。

(文・写真)矢部優慈郎/JICA広報室広報課長

FIELD SKETCH

として激しい戦闘が行われ、供与した機材は散逸した。07年8月にJICAのプロジェクトが始まり、全国随一の高等技術専門学校として開校した。情報工学、電子通信工学、代替エネルギーの3コースに、18歳から30代まで幅広い年齢の男女学生143人が全寮制で学んでいる。

このプロジェクトでは、実習を中心にしたカリキュラムや教材を民間企業と共同で開発し、産業界と連携した人材育成を目指している。パスカル学長をはじめ教員は非常に意欲的で、「ルワンダの科学技術立国を支え、さらには東アフリカ地域のモデル学校となる礎をつくる」と夢を語った。コン

組の中で道傳さんは、「アフリカといっても国によって状況はさまざまです。虐殺で人材を失ったルワンダにとっては、復興を担う人材を育成することが大きな課題です。私たちは何よりもアフリカを知ることから始め、アフリカのそ

組の中で道傳さんは、「アフリカといっても国によって状況はさまざまです。虐殺で人材を失ったルワンダにとっては、復興を担う人材を育成することが大きな課題です。私たちは何よりもアフリカを知ることから始め、アフリカのそ



道傳さんのインタビューに答える岡野専門家